

本間浩 提出 学位申請論文（課程博士）

『日本の聖母信仰と東シナ海周辺地域の媽祖信仰の比較研究』 審査報告書

論文の内容の要旨

本論文は、日本の聖母信仰と東シナ海周辺地域において「天上聖母」称されて祀られる媽祖信仰との比較研究を通して、聖母の本質を神道史的な観点から考究したものである。

内容は、大きく「はじめに」、第一章「神道史学の観点からの聖母研究」、第二章「日本における聖母信仰」、第三章「水の聖母と媽祖信仰」、「おわりに」の五章から構成されている。

「はじめに」では、日本の聖母研究の現在、聖母の定義、聖母信仰の多様性にふれながら、本論文の目的や意義を述べてある。

第一章第一節では、日本における聖母研究の先行研究を整理している。そのなかで、とくに戦後の神道史学における聖母研究の成果に注目し、本論文の指針を明らかにしている。具体的には、熊野三所権現や伊太祁曾神社の祭神に聖母としての性格が認められること、それらとキリスト教における聖母信心との共通性を見出し、日本の聖母信仰を世界の宗教史の潮流の中で位置づけ、そこに普遍的なものが認められると述べている。

また、たんに「聖母」という文字にとらわれずに、信仰の実態から様々な女神に対して聖母と同様の観念を見出し、これを正しく聖母のひとつに位置づけて考察する手法は、一九五〇年代に西田長男によってはじめられたと述べ、その影響を受けている。つまり論者は西田によって示された方向性に則って聖母研究の対象範囲を大きく見直し、広く扱うべきであると力説している。

第一章第二節では、先学によって示された方向性をさらに進展させ、中世における伊太祁曾神社に対する信仰をはじめとする神々に見られる「養い親」という

キーワードを導入して、それが聖母信仰の重要な要素になっていると論じている。その根拠となるのは、古代の神話において生みの親ではない女神が母神として祀られるいくつかの例であるが、中世においては、伊太祁曾神社の縁起、とくにその中に描かれている聖母像にこのような信仰が認められ、「養い親」としての聖母が民衆に観念されていたことの裏付けとしている。そして、伊太祁曾神社の聖母信仰は日前宮や伊勢神宮などにも見られる、古来の「太陽の母子神」に対する信仰に端を発していると述べ、こうした信仰と太陽神・天照大神に対する信仰が結び付けられて中世に縁起として表れたと指摘する。

また、我が国の皇祖神における神系譜の持つ聖母信仰としての性格についても言及し、さらに「太陽の母子神」には「うつほ船」伝承などにまつわる、水神としての性格も顕著であるとし、水の聖母という観念を通じて、新たな聖母論を展開しようとしている。

第二章第一節では、我が国における聖母信仰の代表例であり、明治時代までは

聖母大菩薩と尊称された神功皇后に視点を移し、それを祭神とする福岡県の香椎宮の聖母信仰について論じている。そのなかで鎌倉時代に「聖母大菩薩」信仰が確立されるまでの過程を詳細に検討している。まず、香椎宮が平安時代に廟号を称し、再び宮号に復するまでの過程を歴史的に述べ、周辺の聖母神社の縁起も参照しながら、元来はその地域の女神を祀っていた神社に神功皇后が祀られていく経緯を述べ、「聖母」という神名は平安時代以降徐々に見直されていた神功皇后伝承の「再編」の中で定着していたと説いている。

さらに、神話にみられる「大帯姫」「息長帯日売」などの伝承が、聖母大菩薩信仰の確立に大きな影響を与えていることにも言及している。論者は、香椎宮に神功皇后を聖母として祀る信仰の土台になっている一つとして、古くから見られる海の母子神に対する信仰が、中世になり顕著になったと指摘している。そして、このような水の母子神、処女懐胎伝承などは、世界的に広く見られる聖母信仰の一類型として位置づけ、我が国にだけの信仰にとどまるものではないと述べてい

る。

第二章第二節では、日本の神社に祀られる女神のなかには、しばしば聖母信仰の要素が認められることを、さまざまな伝承や図像などに基づいて論じている。

具体的には、全国の各地に祀られる子安神社、浅間神社をはじめ、古社である賀茂下・上両社、あるいは美保神社などにも聖母に対する信仰が認められると述べている。これらの神社には、処女懐胎伝承や子安の石などに対する安産祈願、水神に対する信仰なども認められ、子を抱いた聖母像を残すところもあるので、聖母神社の範疇に入れて考察すべきであると述べている。

第二章第三節では、我が国における鬼子母神信仰に視点を据えながら、聖母信仰との関係を論じている。元来、鬼子母神はインドにおける子供の守護神として祀られていたものだが、それが奈良時代に日本に受容され、やがて法華経の守護神、あるいは護国の神として祀られたことを、多くの史料を掲げながら論述している。

ただ、わが国で鬼子母神が子供の守護として信仰されるのは中世になってからであり、その背景に聖母大菩薩への信仰が影響していることを指摘している。つまり、中世における聖母大菩薩の見直しと、日蓮宗で鬼子母神を守護神の筆頭においたことが相俟って、両者の信仰は盛行したと論述している。

その証左として、論者は鬼子母神と聖母子像との姿形が類似していることに注目し、さらに聖母に見る処女懐胎と日蓮宗の開祖・日連の誕生に見る処女懐胎とを掲げている。このように鬼子母神と聖母神との縁起や伝承を比較しながら、両者の共通点・類似点を指摘し、両々相俟って、その信仰を拡大していったのではないかと述べている。

また、近世に入ると、鬼子母神信仰は日蓮宗の守護神という枠組みを越えて、広く一般民衆に知られた信仰であったこと、さらに聖母という観念は近世から近代へと継承されていったことも指摘している。

第三章第一節では、東シナ海周辺地域において「天上聖母」「天妃聖母」とし

て祀られる媽祖について論述している。媽祖は中国福建省で発祥した航海守護の女神である。論者は福建省で女神に対する信仰が盛んであったことを明確にしなから、これらの女神信仰の代表的な存在が媽祖に対する信仰であると述べている。また、媽祖信仰が中国の歴代王朝に知られるようになる、次第に高い封号が贈られ、ついには護国の神として昇華されていく過程を歴史的に論述している。その上で「聖母」の名をもつて中国王朝に冊封されたことを裏付ける史料が存在しないことを指摘して、媽祖を「聖母」の名をもつて祀る信仰は、民衆に端を発するものであったと述べている。

また、現代の台湾において、キリスト教の聖母マリアが「天上聖母」として祀られている例にも注目し、二十世紀初頭、中国大陆に現れた「中華聖母」の例にさかのぼってこれを考察している。そして、中国において「聖母」という言葉は、尊敬すべき女性に対して用いられる称号であるので、これがマリアに対して用いられることは不自然であろうと述べている。

次に、我が国に視点を移し、媽祖が「天妃聖母神社」に祀られている例を取り上げ、これらは近世において中国僧、東臯心越の影響によるものであると述べ、その一方で、中国由来の女神でありながらも、地元の信仰に習合して祀られている例を示し、神功皇后の持つ護国の神としての「聖母」の性格に類似点を見出しながら、媽祖信仰も日本における聖母信仰の一例として位置づけて論じている。

第三章第二節は、琉球において媽祖を「天妃」として祀る信仰についての考究である。まず、十五世紀における天妃宮が置かれた那覇の地理的な景観を解説し、その国際的な都市としての性格や、航海人の集う港町としての機能に注目し、琉球に下・上の天妃二宮が祀られた背景に、国家の政治的、外交的な意図に加え、住民の民俗的な信仰が多分に反映されていたことを指摘している。

また、歴代の冊封使によって記録された「使録」にもとづき、天妃宮に対する信仰の実態を窺い、当時の琉球王国、中国王朝における天妃が重要な位置を占めていたことを指摘している。さらに、従来ほとんど顧みられることのなかった波

上の天妃宮の存在に注目し、当時の波上地域の社会や、下・上の天妃二宮との比較を試みながら、その信仰の実態について考察し、琉球における天妃信仰の全貌を明らかにしている。

また、現代における信仰についても、現地の調査に基づいた報告がなされており、このことから波上天妃宮の重要性が再確認出来ると述べている。

そこで論者は、琉球における天妃信仰が、たんに琉球という地域においてのみ展開したと見るべきではないと述べ、これを東シナ海周辺地域全体にまたがる広い視野の中で論じている。このことは聖母研究全体のためにも有益なことであるとしている。

第三章第三節は、キリスト教におけるアンナ崇拝と、西ヨーロッパの山間部に祀られる黒い聖母との関連性について論じている。カトリック教会では、専らマリア信心のみが聖母信仰として扱われてきたが、民間におけるアンナ崇拝にも聖母と同様の観念が認められ、また第二章で論じた聖母のもつ養い親という性格が

見られるのも大きな特徴であると説いている。

そのことをアンナに関する伝承や図像などを用いて実証している。そしてアンナ崇拝の基底には、ケルト地方の古代における大地母神崇拝が認められるとし、これも聖母信心の一類型として考察すべきであると述べている。

さらにケルト地方の古代における大地母神に端を発した一つに黒い聖母の存在があり、これとアンナ崇拝との類似性を指摘し、これらの黒い聖母も、カトリック教会からすれば、異教的・民俗的な信仰として事実上、等閑視されて来たものだが、その一方で、民衆の聖母に対する篤い信仰を表したものであると説いている。

このように、従来の専らマリア信心のみを聖母信仰としてきた研究姿勢に対し、論者は、アンナ崇拝や黒い聖母崇拝ともに、それらも聖母信仰の範疇に入れて考察されるべきであることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本における母子神に対する信仰を「聖母」といった枠組みから、その歴史と現代の様相を、東シナ海周辺地域の媽祖信仰との比較を通して考察した興味深い論考である。

この種の研究は、過去には柳田國男の『妹の力』（大正十四年）をはじめとする一連の業績が見られ、また、論者も注目した琉球地域に関しては、伊波普猷のヲナリ神信仰の研究、そして長田須磨に代表されるノロに注目する女性神信仰研究など、民俗学・文化人類学の分野における多くの調査・研究の蓄積が見られる。

こうした従来の民俗学・文化人類学による業績を参照しつつも、論者は、神道史学からの西田長男や三橋健の日本の聖母信仰研究に注目し、これと密接にかかわる神聖家族の問題意識から、母子神に対する信仰の歴史と民俗を構築しなおそうとした意義は大きい。また、論者が日本国内の宗教史・信仰史のみならず、聖

母信仰の実態を東シナ海周辺地域という、対外関係のなかで捉え直そうとした点も高く評価される。しかしながら、それらが必ずしも十分と言えないのは、論者の神道史学や日本宗教史に関する理解の甘さによるものと思われ、今後、一層の研究が期待されるところである。

そのようななかで、注目されるのは第二章第一節に記述する聖母大菩薩と尊称された福岡県の香椎宮の問題である。そこで論者は香椎宮が神功皇后に対する信仰を取り込みつつ、香椎廟から香椎宮へと推移していった過程を詳細に検討していること、そして九州を拠点として行われた豊臣秀吉による朝鮮出兵といった事変と国難において神功皇后に対する信仰が強く意識されたとの指摘は興味深い考察となっている。

次に第二章第三節は、日蓮宗の代表的な守護神である鬼子母神に関する論考であり、そこに論者の一つの新しい見解が展開されている。鬼子母神信仰については、すでに宮崎英修の『日蓮宗の守護神―鬼子母神と大黒天』（昭和三十八年）

というすぐれた研究があり、その後も主として日蓮宗の視点からの研究が多く見られるなかで、論者は、それらとは違った観点から鬼子母神信仰にアプローチしている。この章は、特にすぐれた論考の一つであるのは、例えば、鬼子母神信仰の基底に、古来の母子神に対する信仰、換言すれば聖母信仰が存在することを明らかにしているからである。そのことから、近世において鬼子母神信仰が広く庶民のなかに普及していった過程を論究しており、説得力のある内容となっている。

これらは確かに新しい試みの一つであるが、この問題は、今後、さらに世界宗教史の潮流のなかで深めて行くことが期待される。確かに鬼子母神信仰は日蓮宗において強調されたが、例えば鬼子母神の持物である柘榴は、スペインの古い聖母像にも認められるのであり、それらとの比較をすることにより、鬼子母神信仰の本質が明らかになるものと思われる。

続いて第三章第一節では、東シナ海周辺地域において「天上聖母」「天妃聖母」として祀られる媽祖について論述し、第二節では、琉球において媽祖を「天妃」

として祀る信仰を、東シナ海周辺地域における媽祖信仰の一例としてとらえている。これらの論考は、大和と中国のはざまにおける、琉球地方の媽祖神に対する信仰を、明・清との交流のなかで把握し直すのみならず、東アジア・東南アジアをも含むグローバルな視点からの位地づけを試みたものとして、大きな成果であるといえる。

最後の第三章第三節では、視点をさらにヨーロッパへと移し、キリスト教におけるアンナ崇拜と、西ヨーロッパの山間部にまつられる黒い聖母との関連性について論じている。そのなかで、カトリック教会では、専らマリア信心のみが聖母信仰として扱われてきたが、民間におけるアンナ崇拜に日本の聖母と同様の観念が認められることを指摘している。そのなかで、特に聖母のもつ「養い親」という観念に注目し、そのことをアンナに関する伝承や絵図などを用いて実証しようと試みている。

しかしながら、それら資料の多くは、先行研究を整理したに過ぎないものであ

り、そのため確証となっておらず、やや付会な結果に終わっている感がしないでもない。つまり一見すると新しい試みのようではあるが、多くの資料を・史料を集め、それらを厳密に考証するという過程を省いているため、砂上の楼閣のような論であるとの批判を受けることになる。

これは論者の研究に対するスタンスからくるものである。論者は初めにおいて神道史学の観点から研究を進めると述べているけれども、それが必ずしも明白に示されてはいない。また比較ということを問題にする余り、神話学・民族学・民俗学・宗教学などの知識の生嚼りによる、いわばうわべだけの比較に終わっており、そのことがむしろ仇となっている。

したがって、本論文は、論者が将来に望む比較神道学への試みであると理解される内容であり、そこで改めて、以下の三点の課題を、今後、取り組んで欲しいと期待する。

第一は、聖母信仰・媽祖信仰の特質としての「水」に関わる問題である。確か

に論者も強調するように、聖母や媽祖は産湯や水難・海難など、水と関係が深いのである。しかし、単に水といっても、泉・井戸・川などの飲料水、産湯のための水、さらに水難や海難と関わり深い海水とは、峻別して考えるべきである。

第二は、前述したように、論者が根拠としている資料・史料の多くは、先行の調査・研究に依拠している点がかかなり多いということである。先行研究を踏まえておくことは当然必要な作業であるけれども、今後これらの一次資料・史料の確認を行うことである。そのことにより、論者は、さらなる新しい史実を見出し得る可能性は充分に存している。

第三は、沖縄や、日本及び世界各地の華人社会の媽祖信仰、特に、その発祥地である中国南東部の福建省をはじめ、今後、フィールド・ワークを繰り返し行い、可能な限りの資料・史料を収集し、媽祖信仰の現代性・必然性が、より深く追求されるべきである。

急速に伸長する中国経済にともない、世界各地へ進出する華人と、二世・三世

の世代となる中華街等の華人社会における媽祖信仰等、それらは質的に差異を有する可能性もある。経済的、またインターネットの普及にともなう情報システムの急激な普及により、共同体における信仰の様態やその普及や、現代の多様化共生を目指す学問状況がある中で、当論文で掲げている問題は、今後ますます展開されるべきであり、その研究の継続が期待される。

以上、将来に期待される課題も多いが、全体としては、本論文の提出者本間浩は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認める。

平成二十五年二月十五日

主査 國學院大學大学院客員教授 三橋 健 (印)

副査 國學院大學教授 石井 研士 (印)

副査 国立歴史民俗博物館教授 松尾 恒一 (印)
國學院大學大学院兼任講師